

近世中村城の造営と城下町中村の形成

— 奥州浜街道と宇多川の経路の推移 —

岩 本 由 輝

- 一 はじめに
- 二 中世における中村城
- 三 奥州東海道と中村城
- 四 宇多川と中村城

- 五 近世中村城の造営
- 六 城下町中村の形成と奥州浜街道
- 七 近世中村城の堀と宇多川

論 文 要 旨

近世中村藩相馬氏の居城である中村城（馬陵城）は慶長六（一六一一）年七月に造営を開始し、一二月に完了をみ、一二月二日に相馬氏はそれまでの居城であった小高城から移っている。中村城の城館としての常時使用は、大永年間（一五二一〜二八）以降といわれているが、戦国期を通じてその帰属をめぐって相馬氏と伊達氏との間において攻防が繰り返される過程で城館としての整備が行なわれたようである。そして、その整備と関連して奥州東海道（近世の奥州浜街道）と宇多川という道と川の経路の推移をみる事ができる。その推移については、今後、本格的な歴史考古学的考察の導入による時代の同定を必要とするが、本稿では現存文書の記述と巷間の伝承にもとづいて一応のまとめを試みたものである。

ところで、中村城の特色として、土塁が多く、わずかにみられる石垣も自然石を積んだ程度のものであり、そのことによつて古城の面影を留めている

といわれているが、それは今日からみてもの結果であり、たとえ戦国の城館として蓄積されてきた施設を用いたとしても、要するに、わずか四か月の間に造りのあとを示しているにすぎないことを認識すべきであろう。

城の造営とともに、宇多川からの引水を利用して堀が設けられるが、そのさい宇多川のいくつかの旧流跡が利用されており、しかも、その流末について城東における水田の灌漑用水としての利用が意図されていることは注目される。

城の造営と並行して進められた城下町中村の建設においては、近世において奥州浜街道となる奥州東海道（近世の奥州東海道）の付け替えが行なわれている。城にとつて街道の位置は重要である。近すぎれば防衛上好ましくなく、遠すぎれば不便である。城下に入つてからの街道には何か所かの樹形が置かれ、直進を避ける仕組みになっていることが明らかである。